
僕の愛しい吸血姫

セブン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の愛しい吸血姫

【Nコード】

N3916BA

【作者名】

セブン

【あらすじ】

——満月の夜、僕は吸血鬼に血を吸われる——

吸血鬼、アリーシア・クロウリーに血を吸われた僕、伊浪恭平は、人としての生を失い、彼女とともに生きる使徒になる。

使徒になってしまったことを深く考えていなかった僕だけど、家を出ていた双子の妹、響子が家に戻ってきたり、アリーシアのような、人間とは違う異端の存在を狩る少女、天川李桜に襲われたり。

そして、アリーシアの弱さと涙を知った僕は、ひとつの決断をする。

プロローグ―愛する君へ―

夜風に揺れる木々のざわめきが大きく音を立て、彼が花草を踏みしめる音を掻き消す。

金色の長髪を揺らしながら、一步、一步、ゆっくり、しかし、確かに歩を進める。

瞳に灯った紅は、ルビーのような輝きを放ちながら、しっかりと前を捉え、目的地を見定めている。

はあ、はあ、と荒々しい息を漏らし、全身を襲う気だるさ、額から伝う汗。

それらすべてを無視して、彼は歩き続けた。

決して止まることなく。

木々をかき分けながら進んだ獣道の果てに、彼は目的の場所にたどりついた。

「ふっ……」

なんとかたどりつくことが出来たということに安堵すると、思わず笑みが零れてしまう。たとえば、これから自分がどのような道をたどる運命にあるか知っていたとしても。

木々に囲まれ、ぽつんと意図的に開かれているように思える草原の上、彼は仰向けに倒れた。

すでに肉体の疲労は限界に達しており、これ以上の移動は無理に等しかった。

だが、それでも良かった。

彼の目的は、この場所にたどりつくことさえ出来れば、果たすことが可能なのだから。

錆ついた機械のように、歪な動きで腕を空に伸ばす。

指の先からは、砂粒のような、金色の粒子が出ている。

いや、違う。

それは彼自身だった。

彼の指が、金色の粒子となって、風にさらわれ、流れていく。

（覚悟はしていた……わかっていてもいた……故に、後悔などありはしない）

ほんの少しの疲労も防ぐために、声には出さず、心の中で自分に言い聞かせるように呟いた。

彼は知っていた。

（すでに私の体は限界だった……ここまで持ってくれたことは奇跡に等しく、だからこそ、私はこの終わりを受け入れよう）

自分がもう、長くはないと言うことを。

死が、目の前に迫っているということ。

満月の色に似た金色の粒子を放ちながら、彼の体は消え、手はもうなく、今も手首から徐々にその姿を変質させている。

もって一分、と言ったところだろうか、と推測しつつ、彼は静かにまぶたを閉じた。

神経を研ぎ澄まし、夜風が揺らめかせる木々のざわめきを、ノイズを除去するようにして排除し、それ以外の音に耳を傾ける。

……がさ、がさ。

静かだが、確かに彼の耳には届く。

何者かが、草を、花を、木を、土を踏みしめる音が。

（私の魔力を感じて追ってきた、か。燃えかす同然の私の魔力を感じ取れるとは、彼らも相当に鋭敏なものだ）

自分を追ってきただろう人物たちに思いを馳せながら、まぶたを開いた。

すでに身動きが取れない彼は、首だけを左右に動かして、自分の現在を確認する。腕は、肘小僧までまだ

残っている。脚は、もう太もも辺りまでしかない。

痛みはなかった。それだけが救いかもしれないな、と再び満月を見

上げる。

（あの子にも、見せてあげたかった）

脳裏に浮かぶ、愛しい娘の笑顔。

（しかし、それも叶わない）

それはきつとだれのせいでもない。だれも悪くない。

（私と『彼女』が選んだ道は、決して間違ったものではなかった。今、ここにたどりついた私だからこそ、そう言える）

かつてここを『彼女』と訪れたとき、彼は後悔した。

自分は間違いを起こしたのではないのかと。後悔して、でもそれを断ち切ってくれたのは『彼女』だった。

だからこそ彼は、そんな『彼女』と交わした約束を果たすために、愛娘を置いて、己の命を燃やしながら、ここまでやってきた。

たとえば『彼女』がもうこの世に存在していなくとも。

自分がこれから、この世から消え失せてしまうとしても。

ただひとつ、『彼女』と交わした約束を果たすことが出来れば、そこに悔いはない。

（さて……そろそろ、か）

腕が消え、脚が消え、もう残りは少ない。

彼の言葉を掻き消すように、一際大きな風が吹く。

彼を中心として、草原を覆うように金色の輝きが灯る。

彼の、命を賭した魔術が草原に響き渡り、風を起こしている。

その瞬間、彼を追っていた足音が早くなる。

しかしそんなこと、すでに彼には関係なかった。

（わた——目的——果たされた——アリサ——）

巻き起こる風が、金色の粒子をさらう。彼の肉体の消失が早くなって、今にも消えそうになる。

おぼろげになる意識の中で、『彼女』と、愛する娘との記憶が走馬灯のように流れる。

いろいろなことがあった。

だが、その中でも彼の中に鮮明に残る、愛しい記憶が、蘇る。

娘を中心に、左右に彼と『彼女』が立って、手を繋ぐ。そうして三人で歩いた、彼の地。

（――アリーシア――）

蘇った娘の笑顔に、微笑み返すようにして、彼は――

（――）

最期を迎えた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【1】

世にも綺麗な少女が倒れていた。

満月の月灯りに照らされて、その存在を主張するように燦然と輝く金色の長髪を乱れさせて、アスファルトに横たわる少女。

その日の僕は、いつも通りに学校に行って、授業を受けて、家から徒歩五分のコンビニでのアルバイトを終えて、家に帰宅する途中だった。

その道中に倒れていた少女を、僕はすぐさま駆け寄り、抱き起こした。

「大丈夫ですか？」

返事はない。

整った顔には少しの汚れと汗が見られる。僕はポケットからハンカチを取り出してそれを拭う。

規則的に繰り返される呼吸は荒く、少女の様態が悪いことを示している。

すぐさま最寄りの病院を思い浮かべてみるが、一番近い病院でも二十分はかかってしまう。携帯で救急車を呼ぶという手もあるけど、残念ながら、バッテリーが切れてしまっているので無理だ。

「……………血……………」

少女の小さな唇から、吐息のように小さな声が漏れた。

『ち』という音。

それを聞いた僕は、少女がどこか怪我をしているのじゃないかと思
い、少女の四肢を見渡す。

少女はいわゆるゴスロリ服と呼ばれる服装に身を包んでいて、変に
露出している箇所が多いので、これはなかなか嬉しい……いや、目
のやり場に困るのだが、見た限りでは出血している箇所は見受けら
れない。

もしかして、僕は少女の『ち』という音を間違って解釈したのかも
しれない。それか、『ち』という音以外にもなにかを言っていたの
か。

「ねえ、だいじょ——」

訊ねようと、少女の顔を見ようとして、僕は固まった。

あまりにも近過ぎる。それこそ、ほんの数センチどちらかが身動きを取れば、唇と唇が重なってしまいそうな距離に、少女の顔があった。

蒸気して赤くなった頬。ふっくらと盛り上がった桃色の唇。美しく長いまつ毛。少女が僕に身体を寄せたことにより、密着した腕に伝わる胸の感触。

どれもが僕の心臓の鼓動を高まらせ、思わず唾をぐくりと飲んでしまおう。

下手に動かすと、僕がわいせつ罪に取られてしまうような危険性もあるため、しばしの膠着状態のまましていると、不意に少女が力を失くしたようになだれ込んできた。

それを受け止めると、僕と少女は地べたで抱き合うような形になってしまった。こんな綺麗な娘を抱きしめられるなんて、とんだ役得だよなあ……とか思っている場合じゃなかった。

僕の肩に顎を乗せる少女の荒い息はそのまま、僕はどうすればいいのかわからず、とりあえず少女の背を撫でることしかできない。

それでどうにかなるかとはわからないが、病気の人にはよくこうしているような気がする。

こういうときには、自分に看病の経験がないことを恨みたくなる。

といっても、僕も妹も身体が頑丈だから、滅多なことがない限り病気なんかしないので、仕方がない。

不意に、首筋をなにかがなぞった。温かくて、ざらざらしていて、それでいて水っ気あるなにか。

全身を駆け巡る悪寒。

脳内に鳴り響くレッドシグナルに、僕は反応することができない。

金縛りにあったかのように、凍りつく肉体。

動かない。

動かすことができない。

指先から足先まで、まったく動かない。

何者かに身体のイニシアティブを握られたように、こちらの命令を一切受け付けない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【2】

そうして、時は訪れる。

「……っ！」

噛まれている。首筋に突きつけられた牙は、僕の首を挟むように突き刺さり、確かな痛みを僕に与えている。

身体が動かないから、いったいどういう状況にあるのか把握することはできない。

だけど、おそらく、僕に牙を突き立てているのは、この少女だ。

そう理解するのが早いかな、自分の中からなにかが失われていくような気がした。

ごくっ、と鳴ったのは少女の喉の音。

なるほど、『血』っていうのはそういうことだったんだ。

こういうとき、自分の理解力の速さが少し恨めしくなる。

この少女は普通じゃない。たぶん、世間一般で言うところの化物とか妖怪とか、そういう類の存在なんじゃないかな。

よくわからないけど。

首筋に牙を突き立てて、血を飲む類の存在と言えば、やっぱり吸血鬼になるのかな。

人間離れた美貌を持っているなあ、なんて暢気に思っていたけど、本当に人間じゃないなんて、こりゃ事實は小説よりも奇なり、ってことなのかな。

心の中で苦笑しつつも、僕の肉体は確かに異変を感じ取っていた。

抜かれていく血を感じながらも、動かない肉体ではどうしようもない。

もしかしたら、僕はこのまま血をぜんぶ抜かれて、死んでしまうのかな？

それは少し、嫌だな。せめて、父さんと母さん、妹になにかを残したかったな。

でも、僕の命ひとつで、この少女を救えるのなら、それはそれでいいことなのかもしれない。

吸血鬼かもしれないけど、絶世の美女と表現してもいいほどの女の子だし、艶めかしい喉の音とか密着した胸から伝わる鼓動とか、すごくいい。

なんていうか、すごく満たされる。見た目とか、ドストライクだし、こんな女の子に殺されるのなら、それはそれでいいかも。

自分で言うのもなんだけど、僕は思った以上に楽観的なかもしれない。

というか、どうしようもないしね。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【3】

……あれ？

ふと、身体に違和感。血が抜かれたからか、少し貧血気味だけど、それでも頭ははっきりと思考を可能としている。

さっきまで動かなかった肉体の動きが解放されている。

加えて、どうしてか血を抜かれる前よりも軽いような気がする。な
んでだろ。

それはまあいい。

おいておこう。

とりあえず、今は首筋に噛みついた少女を、っと。

そう思ったのだが、すでに少女は僕から牙を抜いている。

息を荒くしていたさきほどまでの様子とは打って変わって、安らか

に、寝息を立てて眠っている。

血を吸ったおかげで、回復したのかな。

首筋に手を伸ばしてみる。

そこには確かに小さな穴のようなものが二箇所ある。

触れた手を見ると、赤い血痕がそこには残っている。

やっぱり、吸われたんだよな。

そう自覚して、それでも生きていることを不思議に思う。

大抵のフィクション作品とかだと、吸血鬼に血を吸われた人間は死んでしまうか、吸血鬼のしもべになるかの二つの結末に分類される。

だけど僕は生きている。

だとしたら、僕は後者——吸血鬼のしもべになったのかな。

少しありえない妄想だけど、でも、実際に血を吸われたし。

考えても答えはでない。

答えを持つのは、僕の腕の中で眠りこけている少女だけだ。

僕は少女の身体を背に乗せる。

ここに残していくわけにもいかないし、なにより、僕がこの少女に一目惚れをした、もとい、少女のことが気になってしまっているのだ。

とりあえず家に連れて帰るけど、決して誘拐ではない。

それだけは言うておく。

でない僕が本当に犯罪者になってしまうから。あくまで彼女を保護することと僕に起きた状況を把握するためなのだ。

誰にするでもなく、心の中で言い訳を残して、僕は少女を背負って帰途に着いた。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【4】

少女を家に連れて帰って、僕はまず風呂に向かった。

別に少女に対して卑猥なことをしようと考えているとか、そういうことではない。

バイト帰りにシャワーを浴びるのは僕の習慣なのだ。

いくら例外に当たる出来事が起きたからといって、生活のリズムを崩すわけにはいかない。

少女は現在、居間にあるソファに横たわらせている。

体調が悪そうにも見えなかったから、特になにをした、というのではないけれど、一応毛布をかぶせておいた。

なんというか、彼女の格好は、健全な青少年である僕にとっては毒に他ならないのだ。

シャワーを浴び終えて、ドライヤーとタオルを使って髪を乾かす。

僕の髪は男子にしては長く、よく女子みたい、と言われるような長さなので、手入れは欠かせない。

髪が乾いたところで、僕は居間へと向かう。

「……？」

居間に、少女の姿はなかった。

いや訂正。

「だれ？」

少女が寝ていた場所にいたのは、僕が出会った少女よりも、幾分か幼い容姿の少女だ。

金色の髪や顔立ち、ゴスロリ服は変わらない。

でも、明らかに幼い。

……まさか、容姿が変化した……？

血を吸ったり、幼くなったり、忙しい娘だなあ、なんて思っている
と。

「ん……」

少女の唇から吐息が漏れて、その瞳が開かれた。

僕と同じ黒の瞳を持つ少女は、寝ぼけているのか、視界が定まれないように目だけをきよろきよろと動かし、そして身体を起こした。

身体が小さくなったせいかな、身につけているゴスロリ服がずれ下がり、僕は思わず目を逸らしてしまう。

ただでさえ露出が多いっていうのに、そんなにサービスされるといろいろヤバイ僕である。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【5】

「えっと……大丈夫？」

目を逸らしながら、と言いながらも、目の端に少女の姿を残したまま、訊ねる。

僕の声は聞こえたようで、少女の目が僕を捉えた。同じ黒の瞳だというのに、どうしてか彼女の瞳は黒真珠のように美しく見える。

舐めたい、そんな願望は胸の底に沈めておこう。

「……だれ？」

僕がそうしたように訊ねる少女に、僕は答える。

「僕は伊浪恭平いなみきようへいって言うんだ」

「きょうへい……」

首を傾げる少女。

おそらく、自分の中で僕の名前を検索してみたのだが、一致する人物がいなかったのだろう。

まあ、そりゃそうだろうけど。

対して僕も訊ねる。

「君はだれ？」

「わたし……アリーシア……」

「ありーしあ？ 可愛らしい名前だね」

言うと、少女、アリーシアは顔を赤くした。

しかし、瞬間的に、その顔が豹変する。

寝ぼけていた頭が覚醒したのか、見知らぬ存在である僕に驚いているように見える。

正直、聞きたいことはたくさんある。

君はいったい何者なの？

どうして倒れていたの？

どうして僕の血を吸ったの？

僕はどうなったの？

だけど、残念ながら僕は女性に強引になにかを訊ねることができない。
ような性格ではないので、そうすることはできない。

アリーシアがその口を開いてくれるまで、待つしかないのだ。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【6】

思いつつ、アリーシアを見ていると。

「……なに？」

「い、いや、なんでもないよ？」

ダメだ。やっぱりあの服は僕には刺激が強過ぎる。

僕はアリーシアに一言告げてから、自分の部屋へと向かった。

なにか、着替えになるような服を探すためだ。

本当は妹のものを借りたほうがいいんだけど、妹は全寮制の女子高に通っているから家にはいないし、両親も海外で仕事をしているので、家にいるのは僕ひとり。

そんなときに妹の服がなくなっている、なんてことになれば、僕の立場が危うくなる。

ただでさえ、妹には変態扱いされているというのに。

クローゼットの奥から段ボールを取り出して、中身を取り出す。

僕の幼いころの服がそこにはある。

アリーシアの現在の体型からして、僕が小学生、それも高学年のときの服でいいかな。

それらしき物、無地の白シャツと膝までの丈のズボンを持って、居間に戻る。

「これ、よかったら着替えて。そこを出たところに洗面所があるから」

渡すと、アリーシアは大人しく、僕の指示に従って洗面所へと向かった。

……というか、彼女、自分が縮んだこと、気づいているのかな。

……。

ボタンっと、居間の扉が勢いよく開かれて、アリーシアが居間に飛

び込んでくる。

「……なにこれ」

「いやあ、説明する分には構わないんだけど、とりあえず、自分の今の姿をよく見た方がいいよ」

苦笑いをしながら、アリーシアに言う。

僕がそう言った理由。

アリーシアは、彼女が身に付けていたゴスロリ服を脱いでいた。

しかし、僕が渡した服は着ていなかった。

さあ、それから導き出される答えはなにか。

簡単だ。

「なかなかセクシーな下着だね」

身体が小さくなることによって、ぶかぶかとなった上下黒の下着は
ずれて、彼女の肌を露出してしまっている。

幼くなることで各部が膨らみを失っているけど、やはり、彼女の姿
はあまりにも綺麗で。

僕はダメだとは思いながらも、その姿に釘付けになってしまう。

「っ！」

僕の指摘に悲鳴にならない悲鳴を上げて、そのまま駆け足で洗面所
へと戻って行った。

……いやあ、いいものを見た。

膨らみを失った胸に、くびれを持った腰回り。

白くて細い四肢。

……うん、良かった。

ひとり、ガッツポーズをする僕の姿が居間にはあった。

今なら変態と呼ばれてもたぶん否定できない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【7】

少しして、僕が渡した服に着替えたアリーシアが戻ってくる。

「説明、してもらえる？」

開口一番、アリーシアは言った。

「うん、説明するよ。その前に、ちょっとソファに座ってくれないかな？」

「なにするつもり？」

「大丈夫。やらしいことはまだしないから」

「……まだ？」

「冗談です。しないから、ちょっと座ってよ」

アリーシアは渋々ながら、ソファに腰掛けた。

僕は洗面所に向かって、そこから櫛と髪留めのゴムを持ちだして、居間へと戻る。

ソファに座るアリーシアは訝しむように僕を見ている。

僕はそれに両手を上げて、なにもしないことを示すけど、どうにも信用されていないらしい。

鋭い視線に少しドキドキしながら、僕はソファに座るアリーシアの後ろに回った。

「こんなに綺麗な髪をしているんだから、丁寧に扱わないと」

「ん」

櫛でアリーシアの髪を梳かしていく。

よく妹の髪を梳かしていたから、こういうのは慣れたもんだ。

アリーシアの髪は引っかかることなく、とても手入れが行き届いていることが窺える。

梳かされている間、アリーシアは僕の行動を不審に思いながらも、時折、気持ち良さそうな表情を浮かべていた。

ある程度整えて、最後に長い髪を、ゴムを用いて後ろで結う。

「よし、これでいいかな」

「……なんでこんなことするの？」

「僕が君を愛でたいから、かな」

……。

「冗談だよ？」

「冗談に聞こえない」

「まあ半分は本気だからね」

「今すぐにも離れたいけど、事情を聞かなきゃならないし……」

なんというか、もうすでに変態扱いを受けている気がする。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【8】

それはいいとして。

僕はテーブルのところから椅子を持ち出して、アリーシアの前に座る。

「それじゃあ、なにか話そうかな」

「ぜんぶ。最初から、今までのことを」

わかった、と答えて、僕はアリーシアにすべてを話した。

僕が道端に倒れていたアリーシアを見つけたこと。

アリーシアが僕の血を吸ったこと、それに加えて、僕の身体が妙に軽いことや、気が付いたらアリーシアの身体が幼くなっていたことも伝えた。

すると、アリーシアは顎に手を当てて、考えるような仕草をした。

「わたしがあなたの血を吸った。するとわたしは幼くなり、あなたは身体に変化が起きた……」

「なにかわかったの？」

「……」

答える代わりに、アリーシアは僕を見た。

どこか申し訳なさそうな、そんな瞳が揺らぎながらも、僕を捉え続ける。

「なんて、ややこしいことに……」

「どうかしたの？」

「……今から話すこと、信じられる？」

「信じるよ」

即答で答える。

「君がここで僕に嘘をついたところでメリットがあるとは思えないし」

それに、と付け加える。

「君みたいな可愛い女の子の言うことを、僕は疑わないよ」

少しきざっばい言いまわしだけど、僕は昔からそういう性分なのだ。

僕をこういう風に育てたのは父さんだし、そういう面でも、仕方がないだろう。

笑いながら言った僕に対して、アリーシアは少し顔を赤く染めて、しかし、すぐに真面目な表情になる。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【9】

「まず、わたしのことを話す。わたしの名前はアリーシア。血吸いの一族、吸血鬼と呼ばれる種族に属する妖魔」

「ようま？」

吸血鬼だろうな、ってことは想像がついていたけど、『ようま』という言葉に聞き覚えはない。

どういう字を当てるんだろう。

「人間で言う、悪魔や妖怪、物の怪の総称だと思ってくれれば良い」

なるほど、と頷く。

なら当てる字はおそらく妖怪の『妖』に、悪魔の『魔』で『妖魔』でいいはずだ。

「私はある目的で日本にやってきた。でも、移動のときに力を消費し過ぎて、倒れてしまったみたい」

「力？」

「わたしたち妖魔の力は、魔力と呼ばれる。その力を得る方法は妖魔によって異なるけど、わたしの場合は血を吸うことで、魔力を得るの。でも、事前に用意していた輸血パックをぜんぶ使ってしまったの」

吸血鬼って、輸血パックから血を得るんだ、なんて最近の吸血鬼事情に驚きつつ。

「それで僕の血を吸ったんだね」

「そう。でも、それがわたしの不幸であり、あなたの不幸」

どうということ？と首を傾げる僕。

「あなたは、おそらく、《妖魔殺し》を持った人間」

「《妖魔殺し》？」

「そう。わたしたち妖魔にとっての天敵。妖魔を殺すことができる、

人間が持った異能の力。あなたはそれを所持している」

言われて、考えてみる。

僕にそんな力はない。

生まれてこの方十六年、そんな異能の力なんて大仰なものを使ったことはないし、その存在すら知らない。

僕はどこにでもいるような普通の高校生に違いなのだから。

「気づかないのも無理はない」

「どういうこと？」

「妖魔殺しの共通点は二つ。妖魔に対して優位権を得ること。……
と言っても、力に大小はあるから、すべての妖魔に勝てるというわけではないけど。もうひとつは、その力が生まれ持ったものではなく、後天性だということ。そして、その中でもあなたの妖魔殺しはたぶん、特殊なもの」

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【10】

次々としてくる情報をなんとか頭の中で整理する。

この世には妖魔と呼ばれる存在がいて、アリースィアは中でも吸血鬼と呼ばれる存在。

彼女は持ってきていた輸血パックを失い、魔力が不足して、路上に倒れていた。

そして、そこに通りかかった僕の血を吸った。

そしてそれが僕にとっても、アリースィアにとっても不幸なことなんだと彼女は言った。

僕は妖魔に対して優位権を得ることができる妖魔殺しと呼ばれる力の所有者で、それにはいろいろな種類があるんだけど、僕の妖魔殺しは特殊なものらしい。

頭の中でなんとかまとめて、そしてアリースィアの次の言葉に耳を澄ませる。

「あなたの妖魔殺しはおそらく、『否定』と呼ばれる力。妖魔に関するありとあらゆるものを否定する力。だけど、『否定』の力を持った人間はほとんど自分の力に気づかない」

「どうして？」

「妖魔殺しは普通、自分の意思で発動することが出来るけど、その中でも『否定』は自分の意思で発動することが出来ないものなの。だから、力が覚醒していても、妖魔と接触することがない限り、それに気づくことはない」

そこまで聞いて、ひとつの結論に至る。

「ということは、まさか、アリーシアは僕の妖魔殺し、『否定』の力を受けて……？」

アリーシアは頷いて、肯定を示した。

「あなたの血を吸った結果、わたしはあなたの『否定』の力を受けた。その結果が、これ」

自分の身体を示すように、アリーシアは両腕を大きく広げた。

「あなたの『否定』の力は弱いんだと思う。だからわたしを殺すまでには至らなかった。その代わり、わたしを弱体化させ、身体を幼くするという結果に至ったんだと思う」

それがわたしの不幸、とアリーシアは言う。

僕の血を吸ったから、アリーシアは僕の力で幼くなってしまった。

そこに僕の意味はないし、血を吸ったのはアリーシアなのだけど、どうにも罪悪感が沸いてしまう。

咄嗟に謝ろうとして、気づく。

アリーシアの不幸は、僕の血を吸って、弱体化したこと。

だったら、僕の不幸はいったいなんなんだ？

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【11】

「伊浪恭平」

アリーシアが僕の名前を呼んだ。

複雑そうな表情。

僕がアリーシアに向けていたような表情で、アリーシアは僕を見た。

そしてアリーシアは告げる。

どうしようもない現実を、突きつける。

「あなたは、人間じゃなくなった」

時が止まったと錯覚するような感覚に陥る。

頭を後ろから鈍器で思い切り殴られたような衝撃が、襲いかかる。

「……そうなんだ」

「驚かないの？」

「ううん。驚いてはいるよ。でも、なんとなく予想はついていたから」

アリーシアに血を吸われたとき。

アリーシアが吸血鬼だと知ったとき。

僕の肉体に異変が起きたとき。

可能性として、心のどこかに留めておいた。

自分が人間ではない、なにかになってしまっているかもしれないということを。

それでも、内心は穏やかではない。

恐怖はある。

不安もある。

だけど、きっとそれらを抱いたところで、僕は人間には戻れないの
だろう。

それをアリーシアの表情が物語っている。

戻れるのなら、ああも申し訳なさそうな表情はしないだろうから。

これはきつと諦めだ。

でも、それでいい。

どうしようもない現実なら、受け入れるしかない。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【12】

「それでさ、僕はいったいどういう存在になったの？」

「あなたは、わたしの使徒、具体的に言うと、わたしのしもべに近い存在に変質を遂げたの」

なるほど。

想像通り。

あまり当たっても嬉しくないけどね。

それに苦笑していると、不思議そうにアリーシアが僕を見る。

「あなたは、樂觀的なのか？」

「その言い方はひどくないかな？　せめて前向きと言ってよ」

あながち、アリーシアの表現も間違っていないけど、それを他人に言われるのは少し癪に感じてしまう。

「使徒かぁ……つまり、アリーシアと僕は主従の関係で結ばれたってことだね？」

「そうなる」

主従関係。

……なんだか淫猥な響き。どきどきしちゃうなあ。

「なに笑ってるの？」

「ううん、なんでもない」

思わずにやついていたらしい。

危ない危ない。

妄想の世界にトリップしてしまうところだった。

……使徒、か。

吸血鬼であるアリーシアに血を吸われたことにより、僕は人間ではなくなり、使徒になった。

それがどういう存在なのか、あまり詳しく理解しているわけではないけど、この身体に起きた異変は、確かに僕が人間ではない『なか』であると告げている。

でもまあ、顔とか身体つきに目立った変化は見られないようだし、そういう点では安心していいかも。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【13】

「伊浪恭平」

「普通に恭平でいいよ」

「……恭平、あなたはどうする？」

その言葉に首を傾げた。

どうするって、それはいったいどういう決断を僕に迫っているんだ？

少なくとも、僕の目の前には選択肢らしい選択肢は用意されていない。

アリーシアの黒眼は揺らぐことなく僕を捉え続け、首を傾げる僕に選択を迫る。

「吸血鬼の使徒になったあなたは、これからどうする？」

「君と生きろと言うのなら、それに従うよ？　だって君は僕の主なんでしょ？」

「わたしはあなたの主。でもわたしはあなたに強制はしない。あなたが生きたいように生きればいい。でも、使徒は主が死ぬそのときまで、死ぬことはできない。あなたはわたしが死ぬまで、死ぬことはできない。でも、わたしたち吸血鬼に寿命は存在しない」

「そうなの？」

「妖魔には存在理念と呼ばれるものがあるの。それはその妖魔の存在を支えるものであり、わたしたち吸血鬼の存在理念は『永遠』。永遠を司る妖魔であるわたしに、寿命は存在しない。つまり、あなたは半永久的に死ぬことはできないの。使徒になったそのときから年を取ることもないし、寿命に縛られることもない。文字通り、あなたは『不老不死』になったの。それを踏まえた上で、今まで通り生きたいというのなら、それでもいい」

つまり、僕に示された道はふたつ。

アリーシアとともに、アリーシアの使徒として彼女と生きる道。

それか、アリーシアとは別れ、今まで通り、人間として、と言っても人間ではないのだけれど、普通に生きて行くか。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【14】

「せっかく道を用意してもらって悪いんだけど、もうとっくに僕は選んでいるよ」

「え？」

そう答えて、僕は呆気にとられるアリーシアの前にかしずいて見せる。

アリーシアの左手を恭しく掴む。

「僕は君とともに生きる。それが僕の選んだ道だ」

「……いいの？」

「うん」

即答して、頷く。

「僕はもう人間じゃない。君は普通に暮らしてもいいと言ったけど、

そんなことはできないよね。だって僕には死がない。君が死なない限り、僕は永久に、人間に訪れる死という制約の外に生きることになる。いつかはだれかが気づくよ。おかしいって。そうなれば、そこにはもう普通は存在しなくなる」

アリーシアは僕に二つの道を提示してくれたけど、選べるのはそのうちひとつの道だけなのだ。

二つあったとしても、もう一方を選択することはできないのだ。

僕は人間じゃないから。

だから、仕方がない。

どうしようもない。

なら、僕が選ぶ道はただひとつ。

「君がよければ、君のそばに置いてほしいな。さすがに、ひとりで長い時を生きるのは寂しいから」

笑いながら言うと、アリーシアは顔を歪ませた。

「ごめんなさい。わたしがあなたの血を吸ってしまったから……」

「ああ、ごめん。別に責めるつもりで言ったわけじゃないんだ。だから気にしないでよ」

慌てて取り繕うが、アリーシアの顔は暗いままだ。

うーん、女性の扱い方には慣れているつもりだけど、どうやら失敗してしまっただけらしい。

これはダメだ。

女性の扱い方には気をつけろ、と言い残した父さんに示しがつかない。

いや、父さんは生きているよ？

なんだか死んでいるような言い方だけど、ちゃんと生きて、海外でバリバリに働いているよ？

それはいいとして、どうにかして、彼女を笑顔にしてあげないと。

「ねえ、アリーシア。申し訳ないって思ってくれるのなら、笑ってくれないかな？」

「笑う……？ どうして？」

「僕が君の笑顔を見たいから。可愛い女の子の、可愛い笑顔が僕にとっての元気の源なんだ。だから、笑ってよ。そうして、もう気にしないで。僕を使徒にしたこと」

言うど、アリーシアは少し戸惑いを見せながらも、必死に笑顔を作ろうとしてくれた。

ぎこちない笑みに納得がいかないアリーシアは、何度も何度も、これは違う、こうでもない、なんて言葉を繰り返す。

その姿は十分に可愛らしくて、それを見ているだけでもうたまらない。

いや間違えた。元気になった、だった。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【15】

アリーシアのぎこちない笑顔を見終わって、僕たちは今後のことを話し合うことになった。

僕は改めて椅子に座り直し、アリーシアはソファに腰を下ろしたまままだ。

「アリーシアはなにか、目的があるんだよね？」

「うん」

「それはなに？」

「……お父様を探しているの」

「お父さん？」

そう、と頷くアリーシア。

「わたしの父、アレイスター・クロウリーを探して、私は日本にや

ってきたの」

「いなくなったの？」

「うん。突然いなくなったの。わたしはお父様の使徒から、お父様が日本に向かったということを聞いて、日本までやってきたの」

「探すのは大変だね。なにか他に手掛かりはないの？」

言うと、アリーシアは、

「白い薔薇がある場所だと思う」

と言った。

「白い薔薇？」

「うん。お父様は、よく、日本にある白い薔薇の草原のことを話していた。だからたぶん、そこにいるんだと思う」

白い薔薇か。それだけじゃなんとも言えないな。

僕自身に薔薇に対しての知識がないから仕方がないかもしれないけど、あまり有力な手掛かりとも言えない。

「一応、ネットで検索をしてみることにするよ。むやみやたらと足を使うよりかはまだマシだろうし」

「ねっと……？」

「知らない？ インターネット。文明の利器だよ」

うちのパソコンは父さんのものが一台ある。

父さんが海外に行ってから、それを居間に持ってきて使用している。

妹が家を出ている今、家にいるのは僕だけなんだし、僕の部屋に持っていくてもいいんだけど、わざわざ運ぶのが面倒なので、そのままにしてある。

アリーシアを連れてパソコンの前まで移動する。

「この箱が、ねっと？」

「ううん。これはパソコン。パーソナルコンピュータ」

答えて、パソコンを立ち上げて、インターネットに繋いだから検索エンジンを広げる。

そこに『薔薇』と打って、検索を開始する。

「ネットって言うのは、インターネットの略称なんだけど、ネットは全世界に繋がっているから、調べ物をするときとかには活用することができるんだ」

「……恐るべき、人間の科学技術……」

画面越しに映るアリーシアの慄く表情が可愛らしくて、思わず笑ってしまう。

アリーシアは不思議そうに首を傾げているけど。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【16】

表示された検索結果をいくつか覗いて見てみるけど、やっぱりいうかなんというか、アリーシアのお父さんがいる場所に繋がりそうなものはない。

次に『白い薔薇』で調べてみる。

……こちらも、あまりこれといった情報は得られない。

ふと、薔薇の花言葉が目に入って見てみたけど、関係があるようには思えない内容だった。

僕的には結構興味深い内容だったけど。

特に花言葉の辺りが。これは後々女性に送るときに使えるような知識だ。

ネットで探す、という方法は失敗に終わってしまった。

「うーん、もっと手掛かりがあればいいんだけどね」

「残念だけど、白い薔薇以上に手掛かりらしい手掛かりはない」

そっか、と僕。

すぐにでも見つけてあげたいと思うけど、あまり焦る必要もない、と思う。

「吸血鬼ってことは、アリーシアと同じく寿命がないんだよね？
ということは気長に探したらいいんじゃないかな？」

僕の言葉に、アリーシアは少し顔を暗くして。

「……もう、時間が……」

「え？　なんて言ったの？」

か細い、虫の羽の音みたいに小さな声で、アリーシアがなにかを呟いた。

その声は僕には届かなかった。

だから、訊き返したんだけど、アリーシアはなんでも無い、と首を左右に振るだけだった。

パソコンをシャットダウンして、時計を見る。

すでに時計の針は十二時に差し掛かろうとしている。そんなに経ってたんだ。

気づかないうちに遅い時間になってしまった。

「ねえ、アリーシア。今日はもう寝ることにしない？　アリーシアも疲れてるでしょ？」

「……うん」

浮かない顔のアリーシア。

お父さんの居場所の手掛かりが見つからなかったことに落ち込んでいるのかもしれない。

でも、今僕にできることはない。

見つかるよ、なんて確証もないことを言うわけにもいかないし、これ以上なにかを言うのは止めよう。

今日はもう休ませてあげる。それが一番いいことのはずだ。

空いているのは妹の部屋と両親の寝室か。

妹の部屋は、ダメだな。使うには一番いいんだろうけど、勘がいいあの子のことだ。

だれかが勝手に入ったなら、そのことに気づく可能性がある。

そうなった際に罵声を浴びせられるのは僕だ。

変態の次はどんな言葉で蔑まれるか、わかったもんじゃない。

ならやっぱり、両親の寝室がいいだろう。

掃除も週に一度のペースでしているし、掛け布団は押し入れにあるものを使えばいい。

アリーシアを居間に待たせて、僕は両親の寝室へと向かう。

お互いに個別の部屋を持っているため、寝室には最低限の荷物と大きなダブルベッドがひとつ。

押し入れから掛け布団を取り出して、それをベッドに敷く。

よし、これで問題はないはず。

居間に戻り、アリーシアを連れだって、再び両親の寝室へ。

「ここを使ってくれて構わないから」

「……わかった」

やっぱり、まだ浮かない顔をしているなあ。

しかし、僕にどうにかできることでもない。

少し、冗談でも言ってみようか。

第一章 満月の夜、僕は使徒になる。【17】

「もしかして寂しい？　なら、僕と一緒に寝る？」

断られることを承知で訊ねる。

「……うん」

「だよねえ……………あれ？」

嫌だ、とか、結構だ、とか。

そういう返答を待っていた僕にとっては予想外の答えが待っていた。

思わず素っ頓狂な声をあげてしまうほど意外だったため、僕はすぐに言葉を返すことはできない。

アリーシアのような可愛い女の子と一夜を同じベッドで過ごすことができるというのはとてもいうかかなり嬉しいんだけどそれでも僕も境界線というのはわきまえているし今のアリーシアに欲情するのはロリコン認定を受けてしまうのではと思ってしまうのだけどそれでも彼女が魅力的なことには変わりはないしできれば一緒にベッ

ドで眠ってみたいという願望もなきにしもあらずというかもうなんだか頭が爆発しそうな――

ふいに、アリーシアが僕の腕を引っ張った。

それで僕は正気に戻る。

身長差があるからだけど、見上げる形になったアリーシアの瞳に僕が映る。

「寝ないの？」

「寝ます」

欲望には逆らえない男の子でごめんなさい。

両親の寝室から僕の部屋へと移動して、僕たちはベッドに入った。

あまり大きなベッドじゃないからか、少し窮屈に感じるが、アリーシアの身体が小さいぶん、まだマシだ。

僕がベッドの奥に入り、アリーシアはその横。

もし僕が野獣のようになったときにアリーシアがすぐに逃げられるようにと考えてのことだが、自分でそういうことを考えなければならぬというのは、少し情けなく感じてしまう。

アリーシアに背を向ける形で、僕は目を閉じた。

心臓の鼓動が妙にうるさくて、なかなか寝付けない。

いろいろなことが起きて、いろいろなことを知って、いろいろ状況が変わってしまったから、それらを一度整理するためにも、睡眠は欠かせない。

無理にでも睡眠をとらないと。

脳の中を真っ白にする。

なにも考えない。

無。

なにもない。

空白を生みだす。

余計な思考に睡眠を妨げられないように。

そうしてやってくる。

眠りの時が。

案外、僕は図太いんだな……こんな状況でも、ちゃんと眠ることが……。

「……………ん？」

意識が、どうしてか戻ってきた。

なにかが、寝ちゃいけないと、そう訴えかけていた。

それがなにかはわからないけど、少し違和感がある。

背中の辺りの服が引っ張られている。

それは間違いなくアリーシアの手で。

「アリーシア……？」

泣いている。

アリーシアが、泣いている。

僕の声には反応しない。

だから、眠っているのかもしれない。

でも、確かに泣いている。

僕の意識が戻ったのは、そういうことなのか。

主であるアリーシアが泣いているのを放っておくことは許されないという使徒の自覚。

そういうものが本当にあるのかはわからない。

でも、今はそう思っておこう。

僕は反転して、アリーシアに向き直り、彼女の小さな身体を胸に抱きとめた。

あまりにも小さな身体。

普通の人間じゃないかもしれない。

でも、今この時だけは、アリーシアは普通の女の子に相違なかった。

髪を結うために使っていたゴムは外したようで、長い髪はまっすぐと彼女の腰辺りまであった。

それを撫でると同時に、背中も撫でてあげる。

「大丈夫。僕はここにいるから。僕が、いるから」

その言葉で、アリーシアが安らかに眠ってくれることを願いながら、僕は目を閉じた。

第二章 主VS妹【1】

目の前に、アリーシアの寝顔があった。

さて、ここで選択肢の登場だ。

いち、愛らしい寝顔を抱きしめる。

に、天使のような寝顔を抱きしめる。

さん、抱きしめる。

ここでの僕の選択肢はもちろん、そう――

「抱きしめ、ひぎゃあああああああああ！」

抱きしめようとした瞬間、全身に電気が走った。

これは本当にヤバいんじゃないの？ と死なないと言われながらも、本気で自分の命を心配してしまうほどの電流が身体を走るっていた。

これが漫画やアニメの世界であれば、僕の骨が浮かび上がって、スケルトンマン状態かもしれない。

電流は数秒程度で終わりを告げ、僕は麻痺というバッドステータスを受け、動けなくなっていた。

びりびりする……。

しかしそれも一分程度で回復した。

動けるようになって、初めにアリーシアから離れるために、彼女の身体に触れないようにベッドから降りる。

おそらく、というか間違いなく電流の発信源は彼女だろう。

昨日は抱きしめても大丈夫だったのに、今日はダメなのか。

いや、もしかしたら、僕の邪な気持ちを気取られてしまったのかも知らない。

本能的に危機を感じて、電流を放った……。

自分の中で答えを導き出して、とりあえず、アリーシアを放って、僕は居間へと向かった。

呼びかけて起こしてもよかったけど、昨日のことで疲れているのなら、起こしてあげるのは可哀想だ。

断じて、電流が怖いわけではない。

むしろもう一度受けたいくらい……というのは冗談だけど。

居間からキッチンに移動して、冷蔵庫の中身を見る。

買いだめはしないので、冷蔵庫の中にはあまり食材は入っていない。

そもそも、僕は料理がそれほど得意じゃないし、作ることができるのは目玉焼きとか卵焼きとか、簡単なものくらいだ。

食事はたいていバイト先のコンビニや商店街のスーパーでお惣菜を買ったりしている。

妹が家を出てからはそんな感じだ。

時計に目をやる。

六時過ぎ。

学校まではあと二時間ある。

シャワーを浴びて、朝食を作る。

それでいいか。

僕ひとりだけなら、別に朝食を抜いても構わないのだが、今日からはそうもいかない。

いつまでになるかはわからないけど、少なくとも、アリーシアの方針が定まるまではここににいることになるだろうし、それまでは朝食を作ることを心掛けないと。

アリーシアは僕の主だ。

主に不自由な思いをさせるわけにはいかない。

シャワーを浴びてすっきりしたところで、朝食作りに取りかかる。

買い置きのおパンを二枚、トースターの中に入れて、ダイヤルを回す。

冷蔵庫からはウインナーと卵を取り出し、二台のコンロを使って、ウインナーを焼き、卵は目玉焼きにする。

目玉焼きは、アリーシアの好みが変わらないので、半熟に留めておく。

それらの調理を終えるとほぼ同時に、トースターから焼けた合図が聞こえる。

出来たものを皿に盛り合わせ、テーブルに置く。

サラダなんて優雅なものはないので、簡素な朝食だけど、仕方がない。

明日からがんばろう。

時計を見たところ、まだ時間はだいぶある。

だけど、朝食は出来てしまっているし、冷めてからでは美味しくはないだろう。

僕はアリーシアを起こすために、自分の部屋へと向かった。

一応、ノックを試してみる。

自分の部屋なのにノックするのは少しおかしい気分だ。

でも、もしこの中でアリーシアが着替えているとか、そういうラッキースケベ的なイベントが発生するという恐れを鑑みれば、この行動も仕方がない。

特に、あの電流を受けてからは、あまり下手なことは出来ない。

一度のミスが、電流を誘発するかもしれないのだから。

ノックをしてから少し待ったが、返事はなかった。

まだ寝ているのかもしれない。

「入るよ」

部屋の外から断りを入れて、中に入る。

「……」

アリーシアは起きていた。

ベッドの外に脚を出して、座っている。

でも、どこか寝ぼけているように見える。金色の繊維のような長髪は爆発したように乱れていて、目は半開き。

「起きた？」

「……うん」

「ご飯を作ったんだけど、食べる？」

「……うん」

ちゃんと答えているものの、やはりどこか寝ぼけている様子に苦笑を漏らしつつ、アリーシアの手を引いて、そのまま居間へと向かう。

椅子を引いて、そこにアリーシアを座らせる。

「飲み物はどうする？」

「……牛乳」

「うん。わかった」

冷蔵庫から牛乳を取り出し、それをコップに注いでアリーシアの前に置く。

紅茶とか言われそうで内心どきどきだったんだよな。

なんとなくだけど、アリーシアからは気品を感じるし、そういう人が飲むのは紅茶だ、というちょっとした偏見が僕の中にはあったのだ。

牛乳が入ったコップを見つめながらも、なかなか動かないアリーシア。
ア。

朝は弱いタイプなのかもしれないな。

これからのために覚えておこう。

すぐにでも朝食を食べても良かったけど、僕はそうせず、昨日使ってから起きっぱなしにしてあった櫛を持って、アリーシアの後ろに回った。

昨日そうしたように、アリーシアの髪を梳いていく。

「よしっと」

やっぱり綺麗だな。

さわり心地もそうだけど、見ているだけで一日は潰せそうなほど飽きさせない魅力が、彼女の髪にはある。

なんか、いいな、こういうの。

妹がいるときは、よくこうして梳いてあげたっけ。

僕の双子の妹、伊浪響子は家にいない。

彼女は僕とは違う、全寮制の女子高に通っている。

僕が通う高校とは同じ市内にあるのだけど、それでもやはり家から通うには少し遠い。

希望を出せば、自宅から通うことも許されるのだけど、響子は家を出て行くという道を選んだ。

——兄さんに襲われそうで怖いです——

そんな言葉を残して。

我ながら恐ろしい妹だ。

僕が血の繋がった妹をどうして襲わなければならないのか。

ただ、髪を梳いているときに匂いを嗅いだり、一緒にお風呂に入ろうとしたりと、あくまで兄妹間のスキンシップをはかっている間に、

気が付けば変態扱いされ、家まで出て行かれる始末。

両親不在の伊浪家の調理係りに出て行かれてしまうというのは、主に僕の食生活において大ダメージを与えた。

そのせいで冷蔵庫の中にはほとんど入っていないし、食事だってお惣菜中心。

帰ってきて欲しいという思いはあるけど、響子をそうさせたのは僕のせいみたいだし、仕方がない。

自業自得と思って、耐え忍ぶしかない。

それに、今はいなくて良かったと思える。

もしアリーシアを家に連れて帰ったことを響子に知られれば、間違いなく彼女は警察に通報するだろう。

兄が女の子を誘拐してきました、と。

響子なら間違いなくする。

そういう確信が僕の中にあるだけに、恐ろしい妹だ。

そういう意味でも、現在の響子不在の環境は助かる。

「恭平」

「……えっ？」

「どうかしたの？」

いつのまにか、アリーシアが僕のほうを見ていた。

僕はというと、櫛を持ったままで固まっていた。

「なんでもないよ。ちょっと考え事をしてただけだから」

答えてから、僕はアリーシアの対面に座った。

「考え事って、なに？」

「ん、なんでもないから、気にしないで」

響子のことは、別にアリーシアに話す必要もない。

どうせ響子が家に帰ってくるのは卒業してからのはず。

長期休暇には帰る、なんて言っていたのに、夏休みも冬休みも、春休みも帰ってこなかった。

電話すら寄越さない。

本格的に嫌われているんじゃないか、なんて疑いたくなってしまう仕打ちだ。

だから、アリーシアに響子のことを伝える必要はない。

響子が卒業して、家に帰ってくる頃には、僕たちはもういないかもしれないだし。

「言って」

「ん？」

アリーシアは押しが強かった。

本気で心配するような目で、僕を見つめている。

思わず抱きしめそうになるのを堪えて、僕は訊ねる。

「どうしたの、急に？」

「……これからは一緒にやっていくんだし、その、言い辛いこととかも、ちゃんと言って欲しい、から」

詰まりながら、アリーシアはそう言った。

なるほど。

アリーシアは、僕がアリーシアになにかを言いたいけど、言えないんだと思っているんだ。

考えていたのは響子のことなんだけど、おそらく、誤魔化したところ

ろで、アリーシアは信用しないだろう。

それに、これからの関係を友好に、より親密にするためにも、ここで互いの間に不信感を持つのは避けたい。

しかし、アリーシアに言いたいこと、か。

……そうだ、今朝のことを訊ねてみよう。

「それじゃ、少し訊きたいことがあるんだけど。いいかな？」

「なに？」

「アリーシアって電気を扱えたりする？」

「うん……でも、どうして知ってるの？」

今朝のことを説明してみる。もちろん、僕がアリーシアに抱きつこうとしたということは割愛してだが。

「使徒を持つ妖魔は、使徒を従えるために、その身体に制裁を与え

ることが出来る。でも、それが無意識の間に行われたということは、恭平がわたしになにかをしようとした可能性がある」

「ごめんなさい！」

即座に土下座。

「誤魔化さないんだ……」

「いやあ、おまえのいいところはバカ正直に素直なところだって評判なんだ」

「それ、たぶんバカにされていると思う」

うん、自分でもなんとなく気づいてました。

「なんていうかね、アリーシアの可愛い寝顔を見ていたら、こう、なんだろう。わからない？ 僕のこの気持ち」

「それで伝わってるの？」

「以心伝心、電波送信中。どう？」

「無理だから」

残念、と肩を竦める。

「恭平はバカなのか変態なのか、それとも両方なのか、どれ？」

「残念ながらぜんぶよく言われるワードだよ」

僕はそう思っていないけど。

「少し主従の在り方を考えた方がいいかも……」

「僕、調教されちゃうの？」

「躰は大事よね？」

「ですよー」

……。

「本気？」

「割と」

ちよつとぞくぞくしてきた。

生命の危機的な意味で。

第二章 主VS妹【2】

「そ、それよりも！ アリーシアって電流を使えるんだよね？」

「ん、うん。使える」

無理やりだけど、どうにか話題をもとに戻すことができた。

「それも吸血鬼の力なの？」

そう、とアリーシア。

「妖魔は、大きく分けて二つの力を使うことが出来るの。ひとつは、自分の体の中に流れる力、魔力を練ることで発動する『魔術』。もうひとつは、妖魔によって持った力が異なる『権能』と呼ばれる力」

そこで一度牛乳を口に含んで、飲む。

「吸血鬼であるわたしが持つ『権能』は『支配』『吸血』『雷』の三つ。恭平を使徒にしたのは『支配』の力、血を吸うことで力を得るのは『吸血』の力、電気を司るのは『雷』の力」

「使徒は『権能』とか『魔術』とか、使えないの？」

「使えると言えば、使える。使徒は主から魔力の供給を受けるから、訓練さえすれば『魔術』は使える。『権能』に関しても、使徒は主の『権能』を引き継ぐから、使うことが出来る。恭平の場合は、主であるわたし、吸血鬼の『権能』の中で、『雷』が使える。『支配』と『吸血』は吸血鬼が使うことで効果がある力だから、使えない」

言われて、自分の手のひらをまじまじと見つめる。

力を使える、か。

『妖魔殺し』の力、『否定』は自分の意思で使えるものじゃないけど、『雷』や『魔術』は自分で使うことができる。

でも、使い方がいまいちわからない。

「どうすれば使えるの？」

「『魔術』に関しては、訓練が必要だから、すぐには使えない。でも『雷』は簡単。自分の中に流れる魔力を感じ取って、それを練る。そして放つ。それだけ」

と言われましても。

自分の中に流れる魔力。

自分ではよくわからない。

昨日もそうだったけど、僕が感じる自分の変化は身体が軽くなった、程度なのだ。

魔力がどうのこうのとかは、わからない。

出ろ、出ろ、と念じてみるが、なにも起きない。

自分の手とにらめっこをしていると、不意にアリーシアが僕の手を握った。

瞬間、ぴりりと、手のひらを電流が駆け抜ける。

「これが『雷』の力。威力は最低にしているけど、この感覚を身体の中から出すようにしてみて」

感じる電気に混じって、仄かながら、なにか、別種の力を感じる。

たぶん、それが魔力。

その感覚を感じながら、目を閉じて、自分の中の『それ』を探す。

……あった。ごく微量だけど、感じるができる。

これを、搾り出すようにするんだよな。

手のひらに、温かみが現れた。

それを集めるように、集中する。

胡散しそうになるそれを決して放さないようにして、自分の中から魔力を絞り出す。

「うん、その調子」

アリーシアの声が聞こえたような気がするけど、それを気にしてい

ると、せっかく練った力が散ってしまいそうなので、あくまで練ることに集中する。

.....あれ？

「恭平？」

アリーシアも気づいたようで、僕の名前を呼んだ。

「消えた？」

呟いて、手のひらを見る。確かに、僕は魔力を練っていたはずだ。

手のひらに残る少しの温かみがそれを証明している。

しかし、そこにはもう力はなかった。

途中までは上手く練れていたはずだ。

集中もしていた。それがなぜか、急に突然、消えてしまった。

「……妖魔殺しの影響かも」

アリーシアが僕の手を握ったまま呟いた。

「どういうことなの？」

「恭平の妖魔殺しが『否定』だっていうのは話したよね？ おそらくけど、恭平の中で練られた魔力が、『否定』の干渉を受けたんだと思う」

つまりは、なんだ。

「僕は『雷』の力を使えないってことなの？」

「そうとも言い切れない。途中までは上手く練れていた。だから、ある程度、魔力が高まれば、それに『否定』が干渉するってことだと思う」

「使えるには使えるけど、力の使用に限度があるってこと？」

たぶん、とアリーシアは頷いた。

「消える寸前の力の具合からして、大した威力は期待できない。効果範囲も、直線で一メートルあるかないかくらい」

なんというか、改めて考えてみれば、僕ほど使徒に向かない使徒も珍しくはないんじゃないのかな。

主を弱体化させるわ、権能で行使できる力はさして役に立たないわ、踏んだり蹴ったりだ。

「うーん。どうにかして使えないかな」

「諦めた方がいい。『妖魔殺し』は妖魔の力に対して優位権を持つし、捨てようと思って捨てることができる力でもない」

「ダメか……」

「わたしの力も弱体化しているから、それほど威力はないけど、あなたよりはまともに力を使えるから。もし《狩人》に襲われでもしたら、そのときはわたしが戦うから」

「《狩人》？」

聞き慣れない単語に首を傾げる。

「……それについては追々話すことにする」

「うん、わかった」

「……追及しないの？」

「無理やり女の子から聞き出すっていうのは、僕のポリシーに反するからね。いつかは話してくれるんだから、いいよ。それに――」

僕たちには長い時間があるから、という言葉の口にしようとして、止めた。

「それに？」

「朝ごはん、冷めちゃうから」

用意してあった朝食はすでに冷め始めているけど、ほんのりとした温かみは残っている。

我ながら、上手い逃げ方だと思った。

アリーシアも疑わず、うん、と答えた。

危なかった。

また、アリーシアに暗い表情をさせるところだった。

アリーシアは、少なからず、僕を使徒にしてしまったことに対して罪悪感を抱いている。

それは、僕が気にしないで、と言ってもだ。

だから僕は極力、人間としての時間を失ってしまった、と思わせるような言動は控えるように決めたのだ。

アリーシアの笑顔は見たいけど、暗い表情は見たくないから。

第二章 主VS妹【3】

朝食を食べ終えて、僕は制服に着替えた。

使徒になったと言っても、学校には行かないと。

あまり休み過ぎると、海外に居る両親、ではなく、どうしてか響子の方へと連絡が行ってしまうのだ。

わざわざ僕の学校にやってきて、私が保護者ですから、なんて言っ
て、担任に連絡先を渡していた去年の春先が思い浮かぶ。

先生もびっくりしてたよな、伊浪の妹さんとは思えないって。

……あれ、今思い返してみれば、僕あのときバカにされてたのかな
？ まあいいや。

着替えを終えて、鞆を持って居間に向かうと、アリーシアがテレビ
をじーっと見ていた。

「なにか面白い番組でもやってる？」

「恭平……箱の中に人がいる……この人たちは箱の中に閉じ込められているの？」

テレビの中であの政治家はダメだ、とか、日本を立て直すにはこうするしかない、とか持論を展開するコメンテーターと引きつり顔でそれを聞く司会者が映し出されたテレビを見ながらアリーシアが訊ねた。

パソコンのことも知らなかったアリーシアだけど、まさかテレビのことまでも知らないとは。

「これはテレビって言ってね、家の屋根に取り付けたアンテナで、発信されている電波を受信して、それを流し出す機械なんだ」

「電波……そういうえば、さっきからなにかの電波を感じるとは思っていたけど、これのことだったのね」

「アリーシアってそんなこともわかるの？」

「一応、『雷』を司る妖魔だから」

テレビを見ながら答えるアリーシア。

見たこともない文明の利器に釘付けになるアリーシアの姿は可愛い。

後ろから抱きしめたくなる。

でもそうすればおそらく僕は電流制裁の刑を受けてしまうだろう。

……諦めよう。

いつか、再びこの手にアリーシアを。

その誓いを胸に抱いて、今日は諦めることに。

「っと、そうじゃなかった。アリーシア、僕は学校に行ってくるから」

「学校？ 恭平は学校に通っているの？」

「うん。現役の高校二年生だよ」

どうやら学校については知っているらしく、僕の姿をまじまじと見

つめている。

僕が着ているのは学校指定の制服だ。

黒のブレザーに、下も黒のズボン。どこにでもあるような、普通の制服だ。

「かっこいい？」

両腕を広げて、冗談混じりに訊いてみる。

「そこそこ」

「ははっ、手厳しいね」

素っ気なく答えたアリーシアは、すぐにテレビへと視線を戻してしまふ。

どうやら、現在のアリーシアの関心事はテレビらしい。

まさかテレビに負ける日が来るとは思わなかったなあ。

そうしている間に、家を出る時間が訪れていた。

「アリーシア、お昼はどうする？ 必要ならお金を渡しておくけど」

「いない」

その代わり、とアリーシアがソファから降りて、僕のところまでやってくる。

「屈んで」

「ん？」

疑問に思いながらも、言葉通りに屈む。

ちょうどアリーシアと同じ頭の高さになって、おもむろに彼女は僕のネクタイを緩ませ、ブレザーのボタンを、そしてその中のカッターシャツのボタンを上からひとつずつ外す。

な、なに？ このちよつとときどきな展開。

そして近づく、アリーシアの顔。

ちょっと待って。

僕にはまだ心の準備が――

「っ！」

アリーシアの牙が、首筋に突き刺さる。

そして抜かれていく血。

今度は抵抗することもできたけど、そうはしなかった。

おそらく、これは僕の役目だから。

アリーシアの使徒たる僕の。

一分にも満たない吸血を終えて、アリーシアは僕から離れた。

「吸うなら吸うって言って欲しかったよ」

言いながら、ティッシュを何枚か手に取り、首筋に当てて、漏れ出した血を拭う。

おかげで僕の心臓はばくばくで、今にも飛び出してしまいそうになっている。いやほんとに。

「気にしない。これだけ吸えば、たぶんお昼は抜きでも大丈夫。わたしたち吸血鬼の食事の主体はやっぱり血だから」

「そう？ それはいいんだけど、大丈夫なの？」

「なにが？」

「僕の血を吸って、だよ。また『否定』の力を受けるんじゃないの？」

「それは大丈夫。すでにわたしの中にはあなたの力に対する抗体が作られているから、『否定』の力を無力化して、血だけを得ることができる」

そうなんだ、と僕。

そういえば、アリーシアは僕の『否定』の力は弱いって言ってたしね。

「ん？ だったらどうして小さいままなの？」

「抗体はあくまで『否定』の干渉を受けないようにするだけ。すでに起きてしまった事象に関しては効果が働かないの。こればかりは、地道に力を取り戻していくしかない」

うーん、すぐにでもアリーシアの元の姿を見たかったんだけどな。

今の姿も悪くはないんだけど、いささか子供っぽさが強過ぎる。

やっぱり、僕としては今よりもいろいろなところが成長していらっしやるご主人さまのほうがなにかと……。

「恭平、目がいやらしい」

「おっと失礼」

欲望が目に見れてしまっていたらしい、これは危ない。

っと、そろそろ時間がまずい。

乱れた服装を正して、鞆を持つ。

「それじゃ、アリーシア。行ってくるね」

「うん」

「家にだれかが来ても、対応しなくていいから。放っておいて。それと、外に出るのなら、テーブルに置いてある鍵で戸締りをしてね。四時過ぎには帰るから、それまでに帰ってきてくれると助かる」

家の鍵はふたつ。

ひとつは僕が持っている鍵。これはアリーシアのために置いていく。

もうひとつはここにはない。響子が持っているからだ。

だから僕はアリーシアが家に居てくれないと、玄関の前で待ちぼうけをくらうことになる。

「わかった」

と、アリーシアは頷いて答え、ソファに戻る。

「それじゃ、行ってきます」

「……恭平」

「ん？」

「行ってらっしゃい」

「……うん」

響子家が家を出てからなくなっていたこのやりとりが、少しでも懐かしかった。

第二章 主VS妹【4】

アルバイト先のコンビニを出て、家へと戻る。

僕はアルバイトを辞めた。店長には引きとめられたけど、家庭の事情なので、という理由で押し通した。

アリーシアの使徒になっちゃったので仕方ないですよねぇ、なんてことは言えないからね。

アリーシアの使徒となった以上、極力時間に縛られることはしない方がいい。

学校は仕方がないとしても、アルバイトは元々絶対にやらなくちゃならないというわけでもなかったし。

ただ単純にコンビニに訪れる女性客を見たかった、っていう理由だしね。

なかなか不純な理由だっただけに、辞めることに未練はなかった。

というか、今はアリーシアを愛でるのに忙しいし。……電流制裁に

怯えながらもただけど。

携帯を取り出して時間を確かめる。四時を少し過ぎたところ。

アリーシアが僕の言いつけを守ってくれているのなら、家にいてくれているはず。

そう思って、玄関のノブをそのまま引いてみる。

がちや、つと遮られることなくドアは開いた。うん、どうやらいるみたい。

「ただい……ま？」

足を踏み入れて、気づく。

見慣れない靴がある。いや、訂正。

一年以上見ていなかった靴が、玄関にある。それは間違いなく、彼女のものです、いやいや、でもそんなわけあるはずがない。

だって、一年以上家に帰ってきていなかったんだぞ？　だというのに、なんでこのタイミングで――

「まずい！」

そう思って居間に駆けこんだときには、すでに手遅れであった。

「……」

「……」

そこは確かに、修羅場だった。

ソファに座る我が主、アリーシア・クロウリー。吸血鬼。

かたや、アリーシアを見たまま立ち竦む我が妹、伊浪響子。人間。

そして最悪の状況に今にも逃げ出したい僕、伊浪恭平。使徒。

その三者が居間にそろって、沈黙という無言の圧力により支配されていた空間が弾けた。

「恭平、彼女はだれ？」

「兄さん、彼女はだれですか？」

同時に訊ねられて、どう答えていいものか困る。

アリーシアは、説明しにくい。どう表現していいものか、わからない。

だから僕は、

「アリーシア、彼女は僕の双子の妹なんだ。響子っていうんだけど」

「そう」

興味がないと言いたげに、アリーシアは捨てるように言った。

「兄さん、私の質問にも答えてください」

「いや、その前に、だ。どうして響子が帰ってきているんだ？」

「私だってたまには家に戻ります」

「一年以上帰ってきていなかったのに？」

響子の眼鏡がキラリと光る。

な、なんだ？

「そんなことよりも、兄さん、私言いましたよね？
誘拐はダメだ
と」

やっぱりこうなったあああああああああ！

予想通りの展開に脱力してしまう。

いやわかっていたけど。

だからこそ帰ってきて欲しくなかった。

なのに狙ったかのようなこのタイミング。

ぺたん、と床に座り込んで、仁王立ちする妹を見上げた。

僕と似た顔つきに黒い縁の眼鏡、そしてアリーシアと同じくらいの長さの黒髪。彼女が通う女子高のセーラー服はとてもよく似合っていて、すらりと伸びた綺麗な脚はモデル顔負けだ。

別に身内鼯鼠をしているわけじゃない。響子は可愛い。人目に見ても、だれもが頷くはずだ。

いや、今は、それはどうでもいい。

「大丈夫、兄さん」

「えっ？」

座り込む僕の肩に、響子の手が置かれる。

「人生はまだこれからです。私が一緒にやり直してあげますから、ちゃんと償いましょう？」

「冤罪だ！」

「嘘はダメですよ、兄さん。兄さんの女性好きを一番近くで見てください私だからわかります。兄さんはやるときはやる男」

「その理解のされ方は嬉しくないよ！」

確かに女性は好きだけど。でもちゃんと境界線は引いてるから。ちゃんと犯罪にならない程度にしているから。

というか妹にそんな風に思われていたことが、一番ダメージがきつい！

「あまり、苛めないで」

不意に、アリーシアの声が響き渡った。

その声に、僕と響子はソファを見る。

アリーシアはテレビを見たまま、僕たちの方を向いていない。

「わたしはなにも、恭平に誘拐されたわけじゃない。わたしは恭平

に助けられただけ」

「そ、そう！ そうなんだよ！」

「気安く兄さんの名前を呼ぶな」

「ひいっ！」

黒いよ！ 響子が黒いよ！ 思わず言われてもいない僕が怖がっちゃうほどだよ！

しかし、アリーシアはそんな響子に怯えを見せない。いやまあ、相手は妖魔で吸血鬼なアリーシアなわけだし。

「わたしがだれをどう呼ぼうかなんて、あなたに縛られることじゃない。恭平を恭平と呼ぶのはわたしの勝手」

「また、呼んだ……」

響子の歯ぎしりが聞こえて、僕は慌てて立ち上がる。

「お、落ちついてよ、響子！　らしくないじゃないか！」

いつも冷静に僕を罵倒する響子が、アリーシアに対して異様なまでに敵意をむき出しにしている。こんな彼女、僕は知らない。

なにが彼女をそうまでして苛立たせているんだ？

わからないから、訊ねるしかない。

「響子、どうしたんだよ、いったい？」

「兄さんは黙っていてください」

「そうはいかないよ」

アリーシアを睨みつける響子の前に立ちはだかる。

「響子、彼女が君になにかをしたのか？　君をそうまでして怒らせるようなことをしたのか？」

響子は答えない。

だけど、わかってしまう。

僕たちは双子で、生まれたときからずっと一緒だったから。

「なにもしていないのに、そういう態度は許せないな。僕に対してならいいよ。でもね、それを他の人にはダメだよ。それだけは、僕が許さない」

響子は間違っている。彼女の態度は理に適っていない。だから僕は立ち足はだかる。

僕たちはそうしてきたから。どちらかが間違ったことをすれば、それをどちらかが正す。僕らはそういう兄妹なんだ。ずっとそうやってきた。

響子もそれを知っているから、なにも言えない。口を閉ざして、僕を睨みつけることしかできない。

眼鏡の奥の瞳に込められた感情は怒りだ。

でも、その怒りが向かっているのは僕じゃなくて、アリーシアだっ

てところがよくわからない。

第二章 主VS妹【5】

だけど、響子は引かない。

一步前に踏み出して、僕とぶつかるほどの距離までやってきて、僕に言う。

「どいてください、兄さん」

「それはできないよ。君がちゃんと話してくれない限りね」

「どいてください！」

「響子！」

互いに怒声を飛ばし合いながら、睨み合う。

僕は無意識に、響子の肩を掴んでいた。

「君が理由もなしに、理不尽に怒ることはないって僕は知っている。だから、教えてよ。なにが、君をそうまでさせる？ どうして、な

にもしていないアリーシアに、それほどの怒りを感じているんだ？」

「……………」

ポツリと、響子の口からなにかが零れた。

「え、なに？」

彼女がなにを言ったのかを訊き取ることが出来なくて、僕は訊ね返した。

そして、響子は、僕の目を見て、言う。

「使徒って、いったいどういうことなんですか？」

目の前が、真っ暗になった。

どうして、そんな言葉が響子の口から零れるのかが理解できない。わからない。知らないはずなのに。

響子の言葉に、なにも言えなくなった僕は、アリーシアの電流制裁

を受けて麻痺状態に陥ったかのように、固まった。

僕は今、どんな顔をしているんだろう。たぶん、恐ろしいほどに動揺した顔をしているんだろうな。

それだけで、気づかれる。

これからは、嘘も誤魔化しも通用しない。

響子が、僕のネクタイを掴んで、僕を思考の淵から連れ戻す。

「人間じゃないって、どういふことなんですか？」

「……」

響子の顔が眼前に現れて、僕は思わず彼女から目を逸らす。

ただひとつ、言葉に出来たことはとても情けなくて。

「どうして、君がそれを……？」

アリーシアが話したとは思えない。僕だってもちろん、話してなんかない。だからわからない。

どうして響子が、使徒のことを、僕がもう人間じゃないってことを知っているのか。

そんな響子が、僕になにかを突きつけた。それは小型の黒い機械で、中心部分にはスピーカーのようなものが見える。

「兄さんには黙っていましたが、この家には盗聴器が仕掛けられています」

「えっ」

ですが、と響子。

「それは海外に行った父さんが、わたしたちの安全を考えて、設置していつてくれたものです。わたしは家を出るときに、その盗聴器の存在を明かされ、管理を任されていたのです」

父さんたちが海外に行ったのは僕たちが中学生になって間もないころだった。

まさか、そんなときから盗聴器を設置されていたなんて、知らなかった。

それが、僕たちが高校に進学してからは、響子が管理していた。ということは、この家出のすべての会話は、すべて筒抜けだということになる。

そうか、だから、響子は知っているんだ。

昨日、僕の身のに起きたすべてのことを。

納得すると同時に、僕は逃げ場を失った。

決定的な証拠を響子は持っていて、もうどうしようもない。

なら、言うしかない。

僕の口から、響子に告げるんだ。

それがたぶん、響子の兄『だった』僕がしてあげれる、最後のことなのだから。

「響子、僕は……」

響子は黙って、僕の言葉を待っている。

唇が震えた。

だけど、僕ははっきりと、それを口にする。

「僕は、人間じゃない」

言った瞬間、響子の手がネクタイから放れて、重力に逆らうことなくだらりと垂れ下がる。

持っていた盗聴器が、カタンという音を立てて、床に落ちる。

言ってしまったら、もう止めることは出来なかった。

「人間だった僕は、もういない」

次から次へと、喉の奥から言葉が溢れ出てくる。

「僕は昨日、そこにいるアリーシアの、吸血鬼の使徒になった」

響子がすでに知っていることも、ぜんぶ言う。

「年を取ることも、死ぬこともない、不老不死の存在に、成り果てた」

言い終えて、最後にもう一度、告げる。

「僕はもう……人間じゃない」

そして、終わった。

僕を見る響子の眼鏡の奥に、光る雫が見えた。それは響子の頬を伝って、床へと零れ落ちる。

垂れ下った腕を伸ばして、僕のブレザーを、響子は掴む。

「……どうして、そんな……」

掴んだ手に力が込められる。

「兄さんが、どうしてそんなことにならずに、いけないんですか……？」

「響子……」

抱きしめようか迷って、結局僕は伸ばした腕を彼女の背中に回すことは出来なかった。

僕は、それをしていい存在じゃない。

響子の兄としての記憶も経験も思い出もある。

でも、僕は変わった。変わってしまった。

姿も心も変わっていない僕だけれど、でも確かに変わっている。

人間から、使徒へと。

そんな僕に、響子を抱きしめる資格なんて、ない。

「兄さんは、兄さんは、人間ですよね……？」

涙を流しながら、響子が懇願するように僕を見上げた。

無駄な問答だった。

響子もう知っている。たとえここで僕が、そうだよ、僕は人間だよ、
と言っても、その言葉に意味はない。

わかっているのに、それでも響子が訊ねてくれるのは、それが響子
の優しさだからだ。

彼女は僕を人間だと言おうとしている。

僕が自分を人間だと言えば、彼女はそれが嘘だとわかっている、
僕を人間として扱ってくれるだろう。

だけど、そんな優しい彼女だからこそ、僕は彼女を優しさを否定する。

「響子、僕は、人間『だった』んだ。もう、人間じゃないよ」

最後の一撃だった。真正面から打ち砕いた。

そして、響子は。

「つく！」

僕の胸を強く押して、居間を飛び出した。そして、そのまま家を出て行った。

僕はその後を追わなかった。僕にはその資格はない。僕はもう、響子の兄じゃない。

僕は、アリーシアの使徒なのだ。

多くを望む者は、ただのひとつすら得ることはできない。

僕はもう選んだのだから。迷いはしない。

第二章 主VS妹【6】

「いいの?」

アリーシアが僕を見ていた。

昨日のように、申し訳なさそうな顔で。罪悪感に満ちた表情で。

「響子には嘘は通用しないからね。それに、いずれは気づくことだ。知るのが早いか遅いかの違いで、いずれは知るんだ」

僕はたまらず、アリーシアの手を握っていた。

両膝について、懇願するように、彼女のそれを頬に押し当てた。

「僕はもう、ひとりだ。僕には君しかいない。だから……僕をひとりにしないでくれ……」

「……うん」

ソファから降りたアリーシアが、僕の頭を胸に抱えた。

頭を撫でる手つきは優しく、母のそれを思い出させる。

「そばにいる……だから」

——泣かないで。

これはいったい、なんの涙だろう。

人間じゃなくなったこと？

使徒になったこと？

響子に知られてしまったこと？

アリーシアに縋ってしまったこと？

僕には、その答えはわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3916ba/>

僕の愛しい吸血姫

2012年1月10日05時55分発行